

【寄稿】

## 討論論文：意味ある高大接続のために必要なこと†

岩佐純巨\*

高田中学校・高等学校\* 1)

キーワード：アクティブ・ラーニング、深い学び、探究、総合知、“ことば”の共通理解、高大接続

### 1. はじめに

このシンポジウムの目的にも関係すると思われるので、まず、「質疑の時間<sup>2)</sup>」に出された2つの質問に対する見解を述べておく。

1つは、「質疑の時間」における長濱の発言「高校までで基本的な汎用的学習スキルを身につけていけば……」に対して、小学校教員から以下のような質問が出された。

「大学の先生が『高校のときに』と言うと、高校の先生は『中学校のときに』、中学校の先生は『小学校のときに』と、責任を順送りに初期教育に転嫁しているニュアンスを感じる。今回の改革は、小中高大が同時スタートとして一斉にやることに意味があると思う。」

「〇〇までに〇〇という力を付けて欲しい」という発言はよく耳にし、生産性のない責任転嫁の発言であることもしばしばある。しかし、このシンポジウムは「高大接続を考える場」であり、長濱の発言の意図は、「接続の一つの方法として、『年齢的な能力やそれまでの学修歴に関する考察』を共有し、その上で、『高校ではこの部分なら指導ができるが、この部分になると大学に委ねなければいけない』などの共通理解と指導法の検討が必要であり、それによって、より効果的な接続につながる」という意味であり、冒頭の中西の趣旨説明における問題提起「それぞれの年齢段階でどのような力を身につけていて、どのような力を身につけることが期待されるのか」に対する一つの回答であると理解できる。この年齢的な考察は、意味のある高大接続を考えるときに重要であり、今後更に議論を深めていく必要がある。

2つ目は、「なぜ地域課題なのか？」という質問について、これもしっかりと議論すべき問題である。大学の理由は長濱の回答のように、地方国立大学にとっては必然の選択だろうと理解しているので、高校の立場での考え方を述べることにする。

今現在、(探究学習に)積極的に取り組んでいる学校の多くは「地域課題」である。地域課題に踏み出せないところは、色々と考えたあげく「SDGs」である。来年度ふたを開けたら、全国の高校のすべてが、この2つのどちらかに取り組んでいるのではないかとさえ予想できる。

「なぜか？」については、「質疑の時間」における林の

見解「身近でないとなかなか作業が成り立っていかない、深められない」の通りだと考える。「調べ学習から脱出」し、「自分事としての問題意識」を持って取り組むためには「経験が生かされる身近なものであること」、「取っ付きやすいこと」が大切である(中西の趣旨説明における「探究的な学習のプロセス」の“探究への意欲を高める段階”。

したがって「地域課題からテーマを考える」ことに反対ではないが、「取っ付きやすさ」だけを理由に取り組むと、一時のキャリア教育、週1回の単位つぶしになってしまい、本来の目的を忘れてしまう恐れがある。「なぜ地域課題か？」ではなく、そもそもの「なぜ探究なのか？」というところをもう一度各学校でしっかりと考えた上で、その目的達成のために「地域課題からテーマを探す」という、原点を忘れない取組が求められる。

### 2. なぜ探究なのかについての見解(私見)

「総合的な学習の時間」の失敗を、今度は「学習」を「探究」という言葉に換えてもう一度何とかしたい。「総合的な学習の時間」ということばが使われ始めたときには、「“学校知”は死んだ」とまで言われ、教科・科目ごとの単発的な知識の習得ではダメである、汎用力につながる「総合知」の育成が求められる。そのためには、教科・科目をつなぐ教科横断型の指導が必要だ、ということである。ところが、学校現場の受け止め方は「教科・科目の枠を超えた指導」、「汎用力につながる指導」ということで、同時に求められていた「キャリア教育」に一斉に目を向けたのである。その結果、教科・科目の指導は従来通りで「総合的な学習の時間(キャリア教育)」は週に1回の特別活動型になってしまった(林の事例報告「イベント型のキャリア教育」)。そこをもう一度何とかしたいという訳で、「主体的、対話的、深い学び(アクティブ・ラーニング)」と「カリキュラム・マネジメント」ということばを土台にして、「総合的な探究の時間」と改名したのだと考える。つまり、学校における教育活動(教科指導、クラブ指導、ホームルーム指導、行事など)を全てつなぎ、将来につながる資質・能力を育成せよ、学校における教育活動をつなぐ核となるのが「総合的な探究の時間」であるということである。したがって、キーワー

ドは「総合的な」の方にあり、ここで「探究」に焦点を当ててしまうと前回の失敗の繰り返しになる。個人的には、「探究」ということばは、「深い学び」の言い換えであり、安彦忠彦の学習過程のレベル「習得－活用－探究」の最終段階を意味すると捉えている（安彦忠彦 2016）。

### 3. 探究学習に取り組む上での課題

次に、林の事例報告を踏まえ、高校における「総合的な探究の時間」に取り組む上での課題を整理しておく。

第一には、カリキュラムの問題である。高校での「総合的な学習の時間」の失敗は、上で述べたように、週に1～2回の特別活動型で行おうとしたことにある。特別活動型でやっている限り、「特別な時間」であり、イベント型にならざるを得ない。決められた数人の担当者だけが苦勞し、他の教員は従来通りの教科指導をするだけである。

「総合的な探究の時間」は、各教科・科目の「見方・考え方」をつなぎ「総合知」へ導くためのものである。したがって、日常的な教科・科目指導をつなぐ場として機能させる必要があり、そのためにはカリキュラム整備が求められる。

次の課題は、「教師観・教育観」の問題である。カリキュラムが整備されないまま「探究学習」がスタートすると、「運悪く」担当が回って来た先生だけが苦勞する。そして、その打開策として、この内容は“自分の専門ではない”という理由で他の先生に振る。例えば社会の先生は科学的なことをやる時には理科や数学の先生に振り、逆に理科・数学の先生は政治的なこと、社会的なことをやる時には社会の先生に振る、最後にレポートをまとめるのは英語・国語の先生の役割、という風に責任の振り合いっこが起こる（これは、「協働」ではない）。学校内の責任の振り合いっこが上手く回らないと次の手段を考える。

それは、SSH なんかの指定校が使う「大学の先生」に依頼するという手段である。大学の先生が無理なら院生でもいいから送ってくれよ、と依頼する（これは、“外部人材の活用”ではなく、“イベント型活動”の発想である）。三重県内の総合大学は三重大学だけ。そこに各学校が依頼をしたら、もう三重大は一発で疲弊してしまう。すでにSSH や高大連携の出前講義の依頼等で、数年前からパンク状態だと聞いている。これは、高校の先生の、無責任と言ったら言い過ぎかもしれないが、“自分の専門ではないから”の発想、つまり「教師観・教育観」の問題である。

「質疑の時間」における下村の見解にもあるように、今回の教育改革は、その転換も求められているのである。

3つ目は、「探究学習」と「教科・科目（学問）への興味・関心」とをどのようにつなげていくかという問題である。子どもたちにこういう探究学習（課題研究）をさせるととても楽しそうに取り組む。先日も中学生の課題

研究の発表会を見学してきた。中学校1・2年生の課題研究の発表、中学校3年生の課題研究の発表、そこへゲストで4年生（高校1年生）の取組の発表、というのを丸1日聞いてきた。はっきり言ってお粗末なものだった。けれども、「やろうとする」、まず取り組んでいるということは評価できる。したがって、それを進化（深化）させて“調べ学習”から脱出させるのは指導者の役割、つまり、探究学習を計画・実施するときの仕掛けと工夫である。事例報告者の林からも「課題と方策」が何点か述べられているが、私は教科横断型の授業の実現など、「総合」に焦点を当てた探究活動を考える必要があると考えている。

### 4. 意味ある高大接続とは

最後に「接続」についての考えを述べるが、その前にこの種の教育議論をするときに使われる“ことば”についての留意点を述べておく。

今、教育を語るとき、抽象的なことばや横文字言葉が頻繁に使われる。「探究」という言葉もそうであるが、「アクティブ・ラーニング」、「ジェネリックスキル」、「生きる力」……など。例えば、「生きる力の育成」などと聞くと、耳障りはいいし、大抵の人は「それは大切だ」と同意するに違いない。しかし、「生きる力とは何か？」と問われると、一人ひとりまったく別の力を考えていることもある。先ほど林が問題提起した「PBL」も然りである。PBLには「プロブレム」と「プロジェクト」の2つある。自分達の取組は「どちら」で、それは「〇〇を目指している」からだ、そういうものを明確にして共通理解の元でやっているのか疑問が残る（2つのPBLの違いやその活用法などについては、この後の山田の見解を参考にされたい）。このように、気を付けなければいけないのは、「抽象的なことば」を使うとき、聞くとき、その意味・概念を明確にし、互いの共通理解のもとで議論することである。さもないと、「雰囲気だけで具体性のない目標」に向かっただけの取組になってしまう。

今回の教育改革の土台となる「アクティブ・ラーニング」ということばとその延長線上で使われている「探究」ということばについては尚更であり、教育の接続を考える上で最も共通理解を必要とすることばである。

「アクティブ・ラーニング」は、大学ではもうすでに取り組んでいる。小・中学校はもう大昔からやっている。高校だけが何もやっていないと、今回の改革の議論の中で一番駄目だと言われたのが高校である。高校は今、「小・中学校から上がってきたアクティブ・ラーニング」と「大学から下りてきたアクティブ・ラーニング」に、「アクティブ・ラーニング」という同じことばで挟まれている。この2つの「アクティブ・ラーニング」を区別する

ような話は聞いたことはないが、私は、その違いを意識する必要があると思う。上記の「ことば」に対する共通理解の問題である。手法も違えば目標も異なる。その違いを理解し共有してこそ、各学校段階の連携と接続が可能となる。高校に降ってきたアクティブ・ラーニングというのは、中西の趣旨説明の中で述べられているように、大学の「質的転換答申」で使われた、大学から下りてきたものであり、小・中学校の「グループ学習を中心とした協働学習」とは区別して考える必要がある（議論を始めるスタートとして、“ことばの使い方”を区別するという意味である）。

では、「何をどのように接続するのか」という、このシンポジウムの本題について、私の現時点での見解を述べる。

今後、小中高大のどの学校段階でも、「アクティブ・ラーニング」と称して「探究型の学習（課題研究など）」に取り組むと思う。三重大学の事例報告の中で長濱が「高校の取組と共通する部分が多い」と述べているように、どの学校段階でも、質の違いは別として、似たような取組を行うと考えられる。そうすると接続として、「スパイラル方式で内容・質を高めていく」という“短絡的な”接続が考えられるが、果たしてそれでよいのか。冒頭の小学校教員の質問を別の見方で解釈すると、「各学校段階の教育は、次の学校段階への準備教育なのか？」との質問とも受け止められる。もちろん、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」という学力などは、内容・質を高めて接続されなければならないものだと考えるが、「学びに向かう力・人間性」や「汎用力としての総合知」などの人格形成に関わる部分は、各段階での成果を目指せばよいのではなかろうか。教育の連続性（継続的な指導、接続）が必要な部分も多々あるが、「同じことの繰り返し」の危険もある。子どもたちにとって、新しい学校段階は、新しい世界であり、新鮮で新発見に満ちていることを期待している。その部分の大切さも忘れてはならない。

今回のシンポジウムでは、津東高校の事例報告と、三重大学の初年次教育の事例報告を聞くことができ、両者を比較検討する機会を得た。そして、様々な課題を再確認し、また、その解決策のヒントを得ることが出来た。例えば、些細なことではあるが、長濱が現状報告として「小グループでの議論の方法、これはかなり体得している」と述べているが、私は「大学1年生の成果としては“低すぎる”」と感じた。逆に言えば、「高校でのアクティブ・ラーニング型の授業（AL型授業）がまだまだである」ということであり、「高校でのAL型授業の質を向上させなければ、大学でのAL型授業は“こんなレベル”から始まるのだ」と考えさせられた。もう一つ挙げるとすると、「キ

ャリア教育と学力向上がつながらない（林）」、「スタートアップセミナーにより、大学での学びに必要な学習スキルを全員が身につけているとは言えない（長濱）」という報告から、今の取組には「本来の目的・目標につながらない壁がある」という共通の課題が見える。この課題については、報告の中でもいろいろな観点で考察されているが、今後も、お互いの実践を通しての成果を共有しながら研究すれば、壁を越えるための“現実的な”解決策を見つけることができるかも知れないということである。

“連携・接続”というと、学校間の人的交流や一貫教育に目を向けることが多いが、子どもたちと直接関わるのは、各学校の各先生である。先生一人ひとりが学び、スキルアップすることが求められている。そのためには、次のようなことを話し合う機会（シンポジウム・研究会など）を“定期的に”開催し、可能ならば共同研究をすることが必要であり、それが“意味ある接続”につながると考える。

1. 使われる“ことば”についての共通理解を図ること。
2. 各学校段階（各学校）での「目標、取組、成果」を共有すること。
3. 2の内容を、比較・検討・研究すること。
4. 3の結果を受けて、各自の学校段階での目標・取組を修正・改善すること。

## 注

- 1) 2019年3月19日時点の所属：鈴鹿中等教育学校。
- 2) 2019年3月19日の三重大学PBL公開フォーラム Part2 「PBL(問題発見解決型学習)と「総合的な探究の時間」の接続を展望する」での質疑の時間を指す。

## 参考文献

- 安彦忠彦 (2016) 「習得から活用・探究へ」溝上慎一編『改訂版高等学校におけるアクティブラーニング理論編』東信堂 56-87.

† Junkyo Iwasa\*: Discussion : Essential points for making the articulation between high school and higher education meaningful

\* Takada Junior & Senior High School 2843 Isshindenchou Tsushi, Mie, 514-0114 Japan